毎日新聞　令和4年8月24日（水）掲載

〔第３種郵便物認可〕

「赤水図」授業で活用

江戸時代に高萩の学者が製作

秋山中 地域見つめ直す機会に

高萩市高萩の同市立秋山中学校（小池洋一校長）で22日、江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）の「改正日本輿地路程全図（赤水図）」を活用した授業が実施された。日本大の卜部勝彦教授が指導に当たり、生徒らは地元の偉人の功績から地域を見つめ直していた。【田内隆弘】

5倍に拡大した赤水図を見渡す生徒ら

授業は、卜部教授が主査を務める日本地図学会の長久保赤水図専門部会と、地元の長久保赤水顕彰会（佐川春久会長）が共催。赤水は現高萩市出身で、伊能忠敬の日本地図が完成する42年前の1779年に、日本で初めて緯度を表す緯線（横線）と方位を示す方角線（縦線）を記した赤水図を作製したことで知られる。

卜部教授は、赤水図を5倍に拡大したもの（縦4・2メートル、横6・4メートル）を使って指導。1年生39人が、赤水図と現在の日本地図を見比べながら県庁所在地を探していった。生徒らは市町村合併などで変更された地名にぶつかりながらも、「この川と海岸線から考えるとこの辺りでは」などと推理して赤水図に印をつけていった。

授業を聴いた鈴木咲帆さん(13)は「山や川などにも注目して場所を探すのが面白かった。これだけの仕事をした人がかつて高萩にいたんだと知り、誇らしかった」、松本莉乙さん(12)は「あんなに大きい赤水図は初めて見た。細かい部分まで分かって、製作に命を懸けて頑張っていたことが伝わった」と話した。

卜部教授は「思った以上に生徒は関心を持って取り組んでくれた。赤水図と見比べることが地図帳を見る訓練になる。古地図を地理教育に利用することを目指し、全国に広げたい」と意気込んだ。

赤水図の上に乗り、卜部教授（中央）とともに県庁所在地を探す生徒ら＝いずれも高萩市立秋山中学校で